

マルクス主義的明治維新論の検討  
——現代日本論の理論的な基礎をかためるために——

上山春平

速記録をよんでみると、論旨がよく分らないし、しゃべった言葉がすじの通った文章になっていないので、報告の要点を、あらためて書いてみることにしました。ただし、言い足りなかった点を、かなりおぎないましたので、ある部分は、総会での報告よりもかえってくわしくなっています。

\*\*\*

日本の思想的な伝統について。それは極端な浮動性によってつらぬかれているのではないか。外から新たな思想をとりいれるばかりで、自ら独自のものを作りだそうとしない。また、こちらから外国にたいして、何か本質的なものを与えたという事実はほとんどない。外来思想を、これほどいろいろと、しかもこれほど忠実に受け入れてきた国は他に見当たらないのではないか。多種多様の外来思想を博物館のように大切に保存している。これはあながち悪いことではないかもしれないが、創造性、自発性、自主性もしくは能動性に欠ける点はこまる。(こまるのは、受動性がきつすぎると、思想の発展ということがなくなるおそれがあるからだ。ある思想が来たり、やがて去れば、つぎに他の思想が来たり、またやがて去る。そこに変化はあっても発展はない。発展があるためには、つよい自発性がなければならぬ。また思想に対する強い執着がなければ発展ということはありえない。自分がつくりだしたものの、もしくは自分のもので、という気持がなければ執着も生じない。自発性もしくは能動性ということと執着ということは、どこかでつながっているように思う。) こうした受動的傾向は明治以降の欧米思想の受け入れ過程にも顕著にみとめられる。ここではマルクス主義のばあいに焦点をしばって、この思想的受動性の問題を検討したい。

私は、人生や社会にかんする考えを立てるうえで、また思想史や論理学の研究をすすめるうえで、数年来、マルクス主義から多くのものを学んできた。しかし、「マルクス主義」という言葉は、(一) マルクスの思想、(二) エンゲルス、レーニン、スターリン、毛沢東などすぐれた後継者たちの思想、(三) 各国の共産党およびこれに所属もしくは同調する理論家たちの思想、(四) 共産党に属せずまたこれに必ずしも同調しないマルクス主義者たちの思想、等さまざまな対象について用いられる。したがって、正確な言い方をすれば、哲学思想にかんしては、マルクスからもっとも多く、ついで毛沢東とレーニンから学び、(エンゲルスの『反デュリング論』やスターリンの『弁証法的唯物論と史的唯物論』にたいしては、重大な反対意見をもつ)、社会や歴史の分析については、日本のマルクス主義科学

者から学ぶところが多かった、と言った方がよい。ここでとりあげたいのは、日本の共産党に「所属しもしくは同調する理論家たち」の日本の社会や歴史にかんする考え、さらに具体的にいうと、日本の近代社会の出発点となった明治維新にかんする考えである。それが、やはり、受動的な思想的伝統のサンプルになり終っているのではないかと私は思う。この疑問は、私が私なりの仕方ですべてマルクス主義の方法を明治維新の分析に適用してみた結果、日共の政治綱領のラインに沿う明治維新論と重大なくいちがいを生じたことをきっかけとする。私が明治維新をブルジョア革命として規定する結論に到達したのに対して、日本の理論的基礎を確立した「三二年テーゼ」の線にそう講座派系の理論家たちは維新を絶対主義の成立として規定する。(講座派系の明治維新論に対する私の批判は、『思想』一九五六年一二月号所収の「明治維新論の再検討」という文章でのべた。)私は、両方の結論のくいちがいについて検討を加えた結果、つぎの諸点を明かにすることができた。

(一) 明治維新を絶対主義の成立として規定する見方は、現在では、日本のマルクス主義者の共通な常識となっているが、その明確な出発点をなしたのは「三二年テーゼ」である。

(二) 「三二年テーゼ」以前に、服部之総氏は、『明治維新史』(一九二八年)において、維新を絶対主義の成立として規定した。しかし、この本の文庫型普及版(市民文庫)の解説のなかで、遠山茂樹氏が、「本書『明治維新史』は・・・明治維新は、ブルジョア革命ではなく、・・・絶対王政の成立に外ならぬこと・・・を明かにした。」(二六一頁)と言っているのは当たっていない。むしろ、「明治維新はブルジョア革命でなく、絶対主義形成であるという自明の事実を忘れたとき、労農派理論や服部・奈良本両氏の理論が生れる。」という堀江英一氏の理解(『封建社会における資本の存在形態』一二六頁)の方が正確である。なぜなら服部氏の『明治維新史』のなかに、つぎのような考えが示されているからだ。「日本においては、封建的支配体制の編成替えが行われ、更に直ちに上下からのブルジョア革命が進行し、絶対王政政府をいただく資本主義的帝国経営が進展した。」(二三三頁)「わが国の場合では、外ならぬ絶対王政政府の権力そのものがブルジョア的変革の主体であり、・・・それにもかかわらず廃藩置県後の諸改革はその内容においてにも角にもブルジョア的変革であった。」(二〇六頁) なお服部氏は、『維新史の方法論』(一九三三年)のなかで、しばしば、「ブルジョア革命としての明治維新」ということばを用いているし、また、戦後にでた『明治の革命』(一九四九年)という本のなかにもこうかいている。「明治維新は絶対主義国家をうみだしつくりあげてゆく過程と、その絶対主義を打倒し人民のための民主主義国家をつくりださずにはやまぬブルジョア民主主義革命の過程との、同時的進行であり、二重過程である。・・・明治維新をもってブルジョア革命であると見る見解を、一がいになたしは否定するものではない。」(『服部之総著作集』第五卷九四頁)これは、ブルジョア革命でなく絶対主義の成立である、というのではなく、ブルジョア革命であり同時に絶対主

義の成立でもある、という考え方だ。こうした服部氏の考えを、堀江英一氏は、「講座派の明治政権絶対主義説を一應承認しながら、しかもそれを労農派のブルジョア革命論のうちにつつまこもうとする人に服部之総氏がある。」(上掲論文一二頁)と評した。

(三) 堀江氏と遠山氏の服部氏にたいする評価は異なるが、明治維新をブルジョア革命でなく絶対主義の成立である、とみる点にかんするかぎり、両氏は一致する。遠山氏は、『明治維新』(岩波全書一九五一年)において、明治維新絶対主義成立論の理論的な支えとして、堀江氏の絶対主義論(「本源的蓄積過程における国家権力の問題」季刊社会科学第一集一九四八年)を採用しているが、堀江氏の絶対主義論は、講座派の代表的著作とみられる平野太郎氏の『日本資本主義社会の機構』や大塚史学の成果をうけついでている。その特徴は、旧来の均衡説(絶対主義権力が、封建地主とブルジョアジーの両階級の均衡のうえに立つという説)を否定する点と絶対主義を封建的反動と見る点である。均衡説の否定はすでに平野氏にその萌芽がみとめられる。(たとえば『機構』三二〇―一頁)。また、絶対主義封建反動説は、平野氏によって提出され大塚史学によって発展させられた。要するに、戦後におけるマルクス主義的維新論の代表作とみられる遠山氏の『明治維新』は、平野↓大塚↓堀江というラインに沿う絶対主義論を支えとしている。この絶対主義論は、はじめ平野氏が「三二年テーゼ」にしたがって明治国家を絶対王政として規定するのに都合のよいような絶対主義論をのみだし、大塚氏およびその学派の人々がこうした特別仕立ての絶対主義論をヨーロッパ史の分析に適用してこれに史実の裏づけを与え、堀江氏がこの仕事をさらに理論的に徹底させる、という仕方で行きつづけてきた。その結果は、私の見るところ、歪曲にみちたものになっている。(その歪みについては、大塚史学の中心的メンバーである高橋幸八郎氏の『市民革命の構造』にかんして、かなり立入った論証を私は用意しているが、ここでは省略しなければならない。)

(四) 服部氏とある点で鋭い対立を示しながら、彼とともに講座派系維新史家中の先駆的理論家とみられる羽仁五郎氏は、服部氏の『明治維新史』(一九二八年)の翌年に発表された「明治維新史解釈の変遷」(史学会編『明治維新史研究』所収一九二九年)という論文を、つぎの文章でむすんでいる。「現代は、プロレタリア的立場において、現代にとって必然的なる明治維新史解釈を、かの日本におけるブルジョア革命としての・・・明治維新の理解に見出しうるのみならず、またこの理解を以って実に明治維新時代の正しく科学的客観的なる解釈を明確にし得るのである。」(七九二頁) なお、羽仁氏は、戦後に発表された『日本人民の歴史』(一九五〇年)という本のなかに、「一八六八年の革命は・・・日本の久しい封建的支配にたいする近代革命の端緒をひらいたことにおいては、それはたしかに一つの革命であったが、・・・日本におけるブルジョア革命が最初から・・・封建的支配の残存との妥協の線にしたがったことにおいて、それは反革命をもふくんでいた。」(七二頁)と書いています。羽仁氏も、堀江氏や遠山氏のように、「明治維新はブルジョア革命ではなく、」

と割り切らない。少くとも、この点では、服部氏と一致する。なお、羽仁氏が、戦後の講座派系の人々のように、明治維新は一つの「変革」ではあるが「革命」ではない、といった小手先芸を弄しないで、はっきり、「それはたしかに一つの革命であった」と言い、「一八六八年の革命」と言い切っている点は注目に値する。

(五) 講座派のオルグであり、服部氏や羽仁氏とともにマルクス主義的維新研究の開拓者でもあった野呂榮太郎氏は、つぎのような文章を残している。「明治維新は、明かに政治革命であると共に、また広汎にして徹底せる社会革命であった。それは、決して一般に理解せられるが如く、單なる王政復古ではなくして、資本家と資本家的地主とを支配者たる地位につかしむるための強力的社会変革であった。」(『日本資本主義発達史』三一書房版五四―五頁) これは、服部氏の『明治維新史』より一年ほど早く、一九二六年の末から翌二七年のはじめにかけて『社会問題講座』のためにかかれた「日本資本主義発達史」という論文の一節である。明瞭無比なブルジョア革命論ではないか。なお、彼は、維新における「強力的社会変革」の基礎は「土地の封建的領有の廃止と資本家的私有権の確認とであった。」(五九頁)ともかいている。これは、講座派系の維新論とまっこうから対立する主張である。日共の主流は、「二七年テーゼ」から、明治維新は封建的土地所有を廃止しなかった、という命題をよみとった。ただし、野呂氏が右の論文をかいたとき、「二七年テーゼ」はまだ発表されていなかった。服部氏は「二七年テーゼ」の直後にかかれた『明治維新史』(一九二八年)の第二版(一九三〇年)の序文に「つぎのようにかいている。「本書がその研究の前提として与えられていた当年の論争に対する一應の批判は、下の如くであった。第一に絶対主義についての双方のあいまいなる規定が正された。つぎに、労農派の誤謬、すなわち明治維新において封建的土地所有が廃止されたと見る誤謬が明かにされた。維新政府はすべての絶対主義政府と同様に、封建的大土地所有を廃止せず、これを統一した。」(市民文庫版一一―一二頁)野呂氏は、「二七年テーゼ」のでる直前まで、服部氏が「労農派の誤謬」とよぶ考えを支持していたのだ。しかし彼は、「二七年テーゼ」のでた後に『マルクス主義講座』のためにかいた「日本資本主義発達史の歴史的條件」という論文において、はじめに引用した一節をつぎのように訂正した。「明治維新は、明かに強力的社会革命であったと共に――否、あったが故に、また広汎なる社会変革であった。それは、一般に理解せらるゝが如く、單なる王政復古でもなければ、あるいはまた、封建的支配階級間の政権争奪に過ぎないのでない。といって、明治維新が、直ちにブルジョア革命――有産者団の政権掌握――を意味するものでなかったことは勿論である。それは、たしかに旧封建的生産関係に対して、資本家的生産関係の支配的展開への、従ってまた、旧封建的支配者に対して、資本家および資本家的地主の支配権確立への端初を形成する所の、劃期的社会変革であった。」(一一三頁)さきに引用した簡明勁直な文章とくらべて、何とサンタンたる悪文ではないか。すぐれて「党派的」な人ならば、そこに思想の「発展」をみるのかもしれないが、私はむしろ思想崩壊のしるしをみる。脊骨がポッキリおれている。日共の主流は、

維新論にかんして、「二七年テーゼ」から、維新は封建的土地所有を廃止しなかった、という命題をよみとり、「三二年テーゼ」から、維新はブルジョア革命ではなく、絶対王政の成立に他ならない、という命題をよみとる。「二七年テーゼ」以前にかかれた野呂氏の「日本資本主義発達史」は二つの命題を排除する明瞭なブルジョア革命論であるが、「二七年テーゼ」の影響下にかかれた服部氏の『明治維新史』は第一の命題を採用し(一)で明かにしたように服部氏は第二の命題を採用してはいない。「三二年テーゼ」の影響下にかかれた平野氏の『日本資本主義社会の機構』は第一と第二の命題を採用している。そして、平野↓大塚↓堀江という成熟過程をへて、遠山氏の『明治維新』が生れる。こうした講座派系維新論の発展過程において、私の見るところ、後のものほど理論の歪みがひどくなっている。私は、理論構成の点で、野呂氏の「日本資本主義発達史」という論文をきわめて高く評価したい。つぎに、いくらかの留保をつけて、服部氏の『明治維新史』をとる。さらに、これらとならんで羽仁氏の諸著をあらためて評価したい。ともかく野呂、服部、羽仁、この三氏の維新史研究の業績は、今後の維新史研究の前進に役立つ貴重な示唆を用意しているように思う。日共の主流が、「二七年テーゼ」と「三二年テーゼ」からよみとった二つの命題にかんする批判は『思想』の昨年一二月号にその要点をのべたので、ここでは省略する。すくなくとも野呂、服部、羽仁、三氏の業績には、こうした二つの命題を食い破る要素がふくまれている。これに対して、平野↓大塚↓堀江という理論的発展のラインは、右の二つの命題を基本命題もしくは公理としマルクス主義の古典的著作にふくまれる任意な命題を定理もしくは推論規則とする演繹体系の構築過程である。

(六)野呂氏の初期の業績にふくまれている示唆としては、つぎの三点を私はあげたい。(1)明治維新によって封建的土地所有の廃止が行われたと見る点。(2)封建的土地所有の廃止にもなって「広汎にして典型的なる」分割的土地所有が成立したと見る点。(3)こうした土地所有を前提として、資本主義的所有形態と封建的生産様式との矛盾が日本の農業における中心的な問題となると考える点。この三点のうちはじめの二つは講座派の正統的な考えとはっきり対立する。そして、のちに、野呂氏自身によって訂正された。私は、その訂正を改悪とみる。

(七)服部氏の考えのなかで私にとって興味のあるのはつぎの三点である。(1)ボナパルティズム論。主として『絶対主義論』をみよ。私は、彼が、『明治維新史』のなかで、明治二二年の憲法発布以降の国家をボナパルティズムとして規定している点に強い興味をもつ。服部氏は、ボナパルティズムを、絶対王政と同じく、封建国家からブルジョア国家への過渡的形態である、と見ているが、私は、さらに立入って、絶対王政を「末期封建国家」の一形態、ボナパルティズムを「初期ブルジョア国家」の一形態として規定する。『思想』去年一二月号所収「明治維新論の再検討」(2)織豊政権の成立から明治維新までを初期絶対主義とみる点。これは織豊政権を封建国家の起点とみる安良城説と正面衝突をひきお

こす。二つの説の対立点を整理してどちらが正しいかを検討することは、きわめて有益な作業だと思う。(3) 幕末マニユファクチュア論。この主張にかんれんして、「服部氏は、労農派のブルジョアぬきのブルジョア革命なる空中にただよう明治変革論を、ブルジョアジーによるブルジョア変革論へと修正したものと考えることができる。」と言う堀江氏の批判がある。以上、三つの論点について、服部氏の見解は時によって動揺を示し、あるばあいには支離滅裂におちいつているが、明治維新をブルジョア革命として規定するならば、すっきりと一貫したものにすることができらるだろう。

(八) つぎに羽仁氏のばあい。(1) 維新における社会変革の主要な原動力として百姓一揆を想定する点。この観点はほり下げられるべきだと思ふ。とくにフランス革命やイギリス革命の時期における農民暴動との比較研究からみりのりのある成果をひきだすことができそうな気がする。(2) 経済史家は、国際関係を捨象して議論をすすめるが、羽仁氏は国際関係を重視する。たとえば、『東洋における資本主義の形成』。(3) 思想過程の分析を重視し、これと政治過程や経済過程の相互関関をとらえようとする。この点、国際関係の重視とあいまって、平野↓大塚↓堀江ラインのおちいりやすい経済主義的偏行を克服するのに役立つ。たとえば、『日本における近代思想の前提』。

(九) 現在、マルクス主義者の明治維新論もしくは近代日本社会論は、「二七年テーゼ」と「三二年テーゼ」からよみとられた二つの命題を大前提として立てられているが、その命題は二つともおかしいのではないかと私は考えている。その理由のあらましはさきにあげた論文でのべた。「二七年テーゼ」や「三二年テーゼ」はどちらも外国製であるが、この二つのテーゼの中間に「三一年テーゼ」もしくは「政治テーゼ草案」とよばれる日本製のものがある。これは明治維新をブルジョア革命として規定している。しかし、日の目を見るやいなや「三二年テーゼ」にたたくのめされて、以来、全くかえりみられない。たとえば小山弘健氏の『日本マルクス主義史』には、「この段階における日本マルクス主義の弱点と幼弱さを集中的にしめた政治テーゼ草案」(五九頁) などとかかれている。果してそうだろうか。細部についてはいろいろ問題もあると思ふが、基本になる権力規定にかんするかぎり、この「草案」の方が、「三二年テーゼ」よりも正しいのではないかと私は思ふ。明治維新をブルジョア革命として規定する考えは、「草案」がでるまでにすでにかなり明確になっていた。とくに注目に値するのは、「日本共産党綱領草案」の発表された前年、つまり一九二一年に堺利彦氏のかいた「明治維新の新解釈」(堺利彦全集第六巻所収) という論文、「二七年テーゼ」のである直前、一九二六年の末から二七年のはじめにかけてかかれた野呂氏の「日本資本主義発達史」、「三二年テーゼ」のである三年前、一九二九年にかかれた羽仁氏の「明治維新史解釈の新研究」等である。「二七年テーゼ」を前提としてかかれた服部氏の『明治維新史』(一九二八年) も、さきに検討したように、明治維新ブルジョア革命論と正面から対立するものではない。この本の第二版の序文で、服部氏は羽仁氏の右の論文

に批判を加えているが、それは、たんに明治維新をブルジョア革命として規定するだけでは足りない、さらにつつこんで、「明治維新はいかなるブルジョア革命であったか」を明かにすべきだ、というのである。一九三一年の「政治テーゼ草案」はこうした維新論の成果をふまえて権力規定を行っているに相異なる。野坂参三氏は、「草案」の成立と「三二年テーゼ」によるその否定の経過について、「なぜあの三二年テーゼが生れたかといえれば、当時日本国内およびモスクワにおいて、日本の革命的戦略を変更しようというくわだてがあった。・・・日本は完全なる資本主義で、しかも独占資本が完成している。・・・だから、日本の革命は広汎なブルジョア民主主義の任務をもつ、プロレタリア革命でなければならぬ、ということをもスクワの一部のトロッキストが言いだした。ところがそれにあわして日本でもそういういだった。しかしこれは完全なトロッキイ的あやまりである。日本の現実はそんなものではない。高度に発展した資本主義ではあるが、封建的なものが強固に残っているから、これを打破するために、まずブルジョア民主主義革命をやり、さらに社会主義革命をやらなければならない。これが正しいので、トロッキイ的くわだてを粉砕するのが三二年テーゼであった。」(青木文庫『日本共産党綱領問題文献集』上二二―二三頁)と語っている。「三二年テーゼ」の攻撃目標となった「トロッキイ的くわだて」こそ問題の「草案」に他ならない。「草案」が、「モスクワの一部のトロッキストが言いだし」、「それにあわして日本でもそういういだった。」というのが真相なら、また何をかいわんや、であるが、この野坂氏の評価はすこし酷にすぎはしないか。「草案」のラインをとるか、「三二年テーゼ」のラインをとるか、ということは、煮つめてみると、日本の社会を、西欧型とみるかロシア型とみるか、ということに帰着する、と私は考える。(論証省略)この点にかんじて、「草案」の方が、基本的には、正しいと思う。(この点にかんじて、私は、梅棹忠夫氏が『文明の生態史観』いう論文に示した見地を支持する。)しかもこうした着眼は、「モスクワのトロッキスト」などに教わらなくとも、すでに日本のマルクス主義歴史家によって科学的なうらづけを与えられていたのである。戦列をはなれて外国を逃げあっていた野坂氏のような人が、国内でくるしいたたかいをつづけていた人々のつくりあげた、最初の国産テーゼを、こんな風にあしらうのを見ると、ムカムカしてしようがない。とくにその事大主義のにおいがやりきれない。彼が「トロッキスト」といつているのは、正確には何のことなのか。スターリニズムの批判が公然と行われるようになった現在でも、やはり悪玉として通用しうるものなのか。もつつつこんでいうと、それははたして眞理の名において断罪することができるものなのか。ともかく、右のような野坂氏の考え方は、私が克服したいと思っている思想的態度の一典型に他ならない。

以上、明治維新論に焦点をしばって、日本におけるマルクス主義思想の発展過程における受動的性格を検討してみた。説明不足の点多く、独断的な感じを与えるかもしれない。しかし、あえてこのような試みを行ったのは、つぎのような事情にもとづく。私は、社会や歴史の分析方法として、マルクス主義は価値のある着眼をふくんでいると考えるが、そ

の方法を用いてみると、日本のマルクス主義者たちとひどくちがった結果がでてきた。これは、どちらかがまちがっているに相異ないと思つてよく検討してみると両方のちがいは、外国からの思想的干渉の有無にかかわっているらしいことが分つた。つまり、私の分析の結果は、日本のマルクス主義者たちが自分たちの力で到達した初期の成果と一致する点が多いのに反して、「二七年テーゼ」や「三二年テーゼ」の影響をとり入れた後の成果とはひどく食いちがうことに気がついた。私は、「二七年テーゼ」や「三二年テーゼ」、とくに後者は、あまりにロシア的にすぎはしないかと考えている。それは、日本社会の問題をロシア社会のモノサシで割り切りすぎてはいないか。当時の日本を革命前のロシアに似せてとらえずぎてはいないか。天皇制をツァーリズムに類比させるような無茶をしてはいないか。ロシアから、国際機関の名において、こうした思想的な影響が、ほとんど干渉に近い形で与えられたことも問題であるが、日共の忠実な、あまりにも受動的な、受けとり方に当面の関心はむけられる。このばあい、コミニズムにおけるインターナショナルリズムの原則をつらぬきながら、国際的機関の見解と民族的機関の見解を調整するか、という困難な問題にぶつかる。この問題にたいして、中共やユーゴスラヴィヤ共産党は、独自の解決策を生みだしてきたが、日共はまだ適切な方式を見つけだしていないように思う。なお、この問題はさらにつっこむと、政治と学問の関係にかんする問題にぶつかる。しかし、私は検討をこの点でうちきろう。ただ、私の基本的な目標が、日本社会における思想発展の条件を明かにする点にあることを附言しておきたい。思想にたいする根ぶかい愛着と執念とがなければ思想はたんに変化することはあっても発展することはない。日本のマルキストにそういう愛着と執念をもってもらいたい。そうすれば私は彼らとより一そそみのりのある思想交流ができそうな気がする。私はそのことを願つてやまない。

(一九五七・九・三)